

(国語科)

読む力・表現する力の育成を目指して
～国語の力を高める指導法の工夫～

大阪市立東中本小学校 山本信吾 深川 貴央 泉 千尋

1. 研究主題設定の理由

本校では、「わかった・できた・役に立った」のある学校を学校の教育目標とし、毎日の学校生活の中で「わかったこと・できたこと」を増やし、そのことを生活に役立てたり、それを使って人の役に立ったりできる児童を育てるため、日々の教育活動に取り組んでいる。

児童は、とても人懐こく子どもらしいが、学習面に課題を抱える児童も少なくなく、特に国語の力に課題が見られた。これまで大阪市が実施してきた学年末での「しんだん」においても大阪市の平均を下回ることが少なからずあった。「自分の思いや考えを適切に表現することができない」「文章や言葉の意味を理解できない」「自分の経験だけをもとに考え、文章中の言葉や表現に着目して考えたり、推測したりすることが弱い。」という課題が見られたので、3年間にわたり継続的に国語の力を伸すための指導法を工夫に取り組むことにした。

平成26年度は、「子ども一人ひとりが国語の力を高める指導の在り方～説明文を中心に～」、平成27年度は、「読む力の育成をめざして～子ども一人ひとりが国語科の力を高められる指導の工夫～」、そして、今年度平成28年度は、「自分の思いを持ち、表現できる子どもを育てる～表現力を高める指導の工夫～」をテーマに設定し、研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

目指す児童像を「文章を正しく、わかりやすく音読できる子」「読解力を身につけ、文章を読み取ることができる子」「読書に積極的に親しむ子」「読み取ったことを活かして、表現できる子」とし、国語科の授業に限らず、普段の学校生活の中でより多くの機会や場を設け、＜音読する力＞＜読み取りの力＞＜読書への興味＞＜表現する力＞を高める手立てを、実践を通して検証することとした。読書への興味関心を高める取り組みについては、週に一度来校していただく図書館補助員や保護者・地域ボランティアの皆様にも協力してもらった。さらに、公立図書館との連携により、並行読書などもスムーズに行えるようにした。

3. 研究の概要

研究1年目の平成26年度は、基礎学力としての音読・漢字の力の向上に力を入れた。書かれていることを理解するには、文章を詰まらずにすらすらと正しく読むことが不可欠であり、そのためには特に漢字の読み、言葉を文としてとらえることが大事だった。宿題にされがちな音読を授業の中に取り組み、また、授業の始まりにどの教室でも漢字を一斉に指導することで、子ども達の意識を高めることとした。授業研究では説明的文章の読解を中心に取り組み、各学年での指導事項を明らかにして、指導すべき内容を読み方のスキルとし指導した。

研究2年目の平成27年度では、音読・漢字以外に視写の力の向上にも力を入れた。それにより、児童の書字スピードが速くなり、また、語彙数が増え、理解力が少しず

つアップしてきた。この年は物語文の読み方スキルの指導も計画的に進めた。

3年目の今年度は、音読・漢字・視写の力の継続指導と、2年間の取り組みによって明らかになった表現力を高めるための指導に取り組んだ。

3年間継続して取り組んできた音読については、教科書だけでなく校長戦略予算やがんばる先生の予算をいただき詩文集を購入することができた。場に応じた声の出し方を指導し、広い場所でも通る声を目指して、お腹から声を出すことを意識させてきた。また、より楽しさを演出できるよう、いろいろな読み方のバリエーションを研修し、変化のある指導ができるようにしてきた。その発表の場として、今年度本校では初めて秋に学習発表会に取り組むことにした。

また、タブレットなどの ICT 機器の導入が大阪市の方針で進められ、教員研修を組みながら、表現力や読み取りの力を高めるための一助として、学習にも積極的に取り入れることにした。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 授業の中で多くの時間をとり、ねらいを持った多様な音読を工夫したり、詩文集を使って、声に出して読む機会を増やしたりしてきた。その結果自信を持って大きな声で読み、正しく内容を理解することができるようになってきた。
- ICT 機器や掲示物を活用して導入を工夫し、児童の興味関心を高めることができた。
- 初発の感想や驚き、疑問などを生かしながら単元の学習課題を設定し、毎時間確認することで、児童が主体的に学習に取り組む姿が多く見られた。
- 自分の考えを近くの友達やグループで話し合う時間を確保することで、自分の意見との違いに気づいたり、さらに意見を深めたりすることができるようになった。
- 習熟度別少人数指導の取り組みにより、指導者がよりきめ細かく児童に寄り添う時間が確保できた。発表の機会が増え、児童同士の交流の時間の確保や充実につながった。
- 朝の読書タイム、読書ノートを活用、読書委員会や学校図書館補助員の配置、学級図書の実施などにより、読書に親しむ児童が増え、たくさんの本を読むようになった。
- 学級でのスピーチや音読、11月の学習発表会での取り組みによって、たくさんの人前で表現する楽しさを味わうことができた。

(2) 今後の課題

- 一人一人ののびは認められるが、基礎基本としての国語の力の定着のために、今後も継続的な、かつ計画的な取り組みが必要である。
- 課題解決の交流の場から学んだことを感想や手紙にしてまとめて書くなど、さらに深い読みができるための指導を行っていく必要がある。
- 書く力を高めるための作文指導のステップなど、本校児童の実態に合わせた指導方法を探る必要がある。
- 表現していく力をさらに伸ばしていくための表現する場や時間の確保をするように努める。
- ICT 機器の有効な活用の仕方を探る。
- 図書環境を整備し、さらに本好きの児童を育て、読む本の量だけでなく、より深読書書へと発展させていく必要がある。